

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月31日現在

機関番号：62608

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720084

研究課題名（和文）南北朝期和歌における王朝文化の継承と禅文化の流入についての研究

研究課題名（英文）The inheritance of dynastic culture and the influx of Zen culture in The Waka poem of Nanbokutyou Period

研究代表者

阿尾 あすか（AO ASUKA）

国文学研究資料館・研究部・特定研究員

研究者番号：30523360

研究成果の概要（和文）：

最初に、伏見院の和歌における王朝文化継承および隠逸詠の具体相を明らかにした。伏見院の源氏取りの特徴は、物語の筋には関係のない自然描写をも摂取するところにあり、『源氏物語』に王朝文化の美意識の典型を見たためと考えられる。持明院統派宮廷文化は、伏見院の代に既に変容しつつあった。院の隠逸詠については、『白氏文集』など漢詩文からの影響が大きい。持明院統派宮廷への禅文化の流入状況は現在研究中である。また、上記と関連して、題材から生々しさを排除して歌語へと再生させねばならない特異歌材の本質、京極為兼の、密教に則った為頭流古今伝授との接触と、京極派歌論との関係を指摘した。

研究成果の概要（英文）：

In this research, it was started with clarifying the concrete aspects of the inheritance of the dynastic culture and the poetry of seclusion in the Waka poems of Hushimiin. It cleared that the characteristics of Genjidori, borrowing from Genji, of Hushimiin reside in the point that even the descriptions of nature which had nothing to do with the plots of stories were included, such Genjidori was meant for pursuing a pattern of aesthetic sense of the dynastic culture. Such attitude of Genjidori indicated that the court culture of Jimyoin-party was showing a sign of transformation in the reign of Hushimiin. Additionally, about the poetry of seclusion of Hushimiin, it was from Chinese prose and poetry such as "Hakushibunshuu" that had bigger influences. Presently, the work is being advanced to clarify the Confucianism of Hanazonoin and the situation of influx of Zen culture, into the court of Jimyoin-party. Additionally, in relation to the above points, as for the innate characteristics of unique materials for Waka poem, it was pointed out that they are of such nature that vividness needs to be excluded from the subject materials so that they will be born again and composed as expression for poem. I pointed out that Kyogokutamekane had a contact with Kokindenju, the initiation into the secret of Collection of "Kokinwakashuu", of Tameakiryuu which followed Mikkyo, which is related to the establishment of the new theory of KyogokuhaWaka poetry.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	29,350	8,805	38,155
2011年度	570,650	171,195	741,845
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：中世文学・和歌・南北朝時代・持明院統・和漢比較・京極派

1. 研究開始当初の背景

南北朝期は、政治史的、文化史的に見て過渡期とされる。文化的には、天皇家の権威の象徴である勅撰和歌集の撰集が続行されつつも、武家が持ち込んだ禅文化が流入するなど、旧来の純然たる王朝文化が終焉を迎え、新時代の文化である室町文化の萌芽が見いだせる時期である。代表者は、北朝方の持明院統派宮廷を中心とする歌道の流派、京極派和歌について、特に持明院統派の花園・光厳院が撰集に深く関わった、京極派の勅撰集、風雅和歌集についての研究を行ってきた。その結果、同歌集に見られる隠遁志向は、同時代の禅文化からの影響を受けたものであり、観念的傾向は、花園院の政教思想と儒教思想に由来することが明らかとなった。しかしながら、隠遁志向については、花園院の父で鎌倉後期の天皇である伏見院にまで遡ると考えられ、持明院統宮廷での禅文化の摂取の始まりについては未だ不明な点が多いことから、鎌倉後期にまで遡っての調査研究が必要であることが判明した。また、花園院の政教観、儒教思想について、和歌の側から詳細に論じた先行研究はない。天皇家が二つに分かれた両統迭立期という時代性も考えれば、天皇観にも及ぶ問題であり、更に考察を深める必要がある。

2. 研究の目的

上記で触れたような問題を踏まえ、本研究では、

- (1)花園院の儒教思想と和歌表現について、
- (2)持明院統派宮廷における禅宗文化の影響、
- (3)京極派和歌の隠逸詠の発生とその後の同派に及ぼした影響、

(4)京極派和歌における王朝文化の継承と受容の四点について考察することとした。

(1)については、花園院の儒教思想についての具体的な性格を明らかにし、それが宋の儒教思想（宋学）や当時の禅宗の儒教観と関わりを持つものであったのかについても考える。

(2)については禅僧を介して日本に紹介された宋代の詩論が後期の京極派和歌に及ぼした影響について明らかにする予定であった。

(3)は、京極派和歌の持つ隠遁志向が伏見院に端を発しており、伏見院とその離宮伏見殿、院の後、永福門院の里第北山第からの景観が隠逸詠に影響を与えていると見られることから、伏見殿と北山第の京極派和歌における影響を中心に考えることとした。また、そうした離宮や里第が、王朝古典の舞台と重ね合されて新たな詩境を作り出していることから、京極派和歌における、王朝古典文学を中心とした王朝文化の摂取を、表現摂取の問題を中心に考えることとした。持明院統派即ち北朝宮廷における王朝文化の継承と禅文化の流入の状況を探ろうとすることにした次第である。

3. 研究の方法

上項「2. 研究の目的」(1)にあげた目的については、花園院が春宮時代の光厳院に与えた『学道之御記』『誠太子書』の記述に見られる儒教思想がどのような性質のものであったかを整理した上で、宋学からの影響を検討する。また、それらが実際の和歌にどのように反映しているかについても表現の検討を通じて考察する。また、(2)については、古

記録や五山版の刊記などを調査し、鎌倉後期から南北朝期にかけての、持明院統派宮廷における禅宗の流入状況について検討する。そこから、京極派和歌の隠逸詠の宋詩摂取について検討する。宋の詩文集や詩論は禅僧によって我が国に紹介されることが多かった。(2)の問題は、宋文化が宮廷に流入した時期を知る手がかりにもなろう。(3)については、伏見院の和歌を対象に検討する。院と同時代の古記録、歴史物語や日記文学、和歌、室町時代前期の伏見宮家の記録などから、伏見殿に関連する記事や歌などを中心に調査し、離宮伏見殿とその周辺の地理の復元を試みる。伏見殿については現在、その位置する不明であり、これも意義のある作業と考える。その上で、伏見院の和歌から、伏見殿・北山第からの景観が詠まれていると考えられるものを抽出し、どのような意図で詠まれているか調査、分析を行う。また、(3)と関連する(4)についても、並行して取り組む。伏見院の和歌表現に、『源氏物語』とりわけ宇治十帖の内容・表現を摂取したものがないかを検討する。これは伏見院宮廷には著しい『源氏物語』愛好の傾向があったこと、伏見院の和歌に、詠歌主体を王朝文学の主人公にしたものが散見することなどから、伏見殿や北山第を『源氏物語』宇治十帖の宇治に見立て、作中人物になぞらえて詠んだ歌があると推測されるからである。隠棲の地であった宇治を舞台にした宇治十帖は、新古今和歌でも隠遁志向と結びつけて詠まれた。伏見院の、『源氏物語』を中心とする王朝古典摂取の様相を整理することで、(3)の隠逸詠の問題についてアプローチしていく。

4. 研究成果

本研究一年目と二年目では、「2. 研究の目的」(3)と(4)の問題を中心に考察した。ま

ず、伏見院の和歌における王朝文化継承および隠逸詠の具体相を明らかにすることから取り組んだ。

王朝文化については、「3. 研究の方法」に記した通り、『源氏物語』を対象とし、伏見院の和歌表現における『源氏物語』摂取について考察することとした。その前に、伏見院とは別の時代における『源氏物語』についての認識、同物語からの表現摂取の様相について確認作業を行った。5〔雑誌論文〕③から⑥までがそれに該当する。当時の勤務先であった国文学研究資料館で参加していたプロジェクトの仕事の一環ではあったが、他の時代と比較対照することで、伏見院の源氏物語摂取の特性を明らかにすることができた。⑥は室町時代の歌人正徹がまとめた注釈書であるが、当時の歌人達が『源氏物語』を歌や連歌を巧みに詠むための実用書として認識していたこと、テキストへの厳密な意識を持っていないことが窺われた。③～⑤は江戸時代のもので、⑤は作中和歌の抜書集、④は『源氏物語』の巻名を題に詠みこんだ定数歌、③は『源氏物語』の表現を摂取した和歌を収載した歌書である。これらからは、作中歌以外の物語の地の文の細部の表現でも和歌の題材として摂取されており、それが多くの歌人達に共有されていたことが窺われる。なかでも③の『源氏物語歌寄せ』は『源氏物語作例秘訣』の異本であるが、同書はこうした地の文がどのように和歌に摂取されているかを知る手がかりとなる。調査の結果、地の文の摂取は近世以前より見られること、採られた物語場面も多岐にわたっており、これらを摂取した和歌は同書に収載された以上に多いと予測されることがわかった。

上記のことを踏まえ、伏見院の和歌表現における『源氏物語』摂取について分析したところ、大きく、詠歌主体を『源氏物語』の作中

人物として詠んだ恋歌と、地の文の自然描写から摂取した叙景歌に分けられた。とりわけ後者は物語の筋には関係のない自然描写をも取り込んで、純粋な叙景歌として詠んでいるところに特徴がある。こうした源氏取りは他の前期京極派歌人にも見られ、心の中で再構築した自然を表現しようとする京極派和歌のあり方とも関係すると思われるが、一方で『源氏物語』に王朝文化の美意識の典型を求めたことにも起因しよう。『源氏物語』が深く読みこまれ、摂取が地の文にまで及ぶようになったと見るができるが、それは、宮廷において純粋な王朝文化が失われつつあったことを意味している。伏見院の代において、持明院統派宮廷の文化はすでに変容の兆しを見せ始めていたということができよう。

また、これと関連した(3)の問題において、本研究を進める見通しとして、伏見院の、『源氏物語』宇治十帖からの表現摂取と隠遁志向の関連性を推測した。院には、宇治十帖から摂取した歌があるが、山の遠景を詠うなど隠者の視点に仮託した隠逸歌以外に、純粋な叙景歌に分類されるものもあり、院の隠遁志向が王朝文学的な隠遁とばかりは言えないことが判明した。隠逸詠を分析すると、『白氏文集』から摂取したものが多く、「市隠」の思想に基づいたものも見られる。また、離宮のあった伏見の地をユートピアとして詠むものが多い。そもそも、こうした隠遁に自足した心境を詠む歌は、漢詩からの影響であり、禅宗の影響を受けた後期京極派和歌に顕著なものである。したがって、すでに伏見院によって禅宗的なものを志向する方向性に先鞭がつけられていたことが判明した。

上記(3)、(4)に得られた結果は、5〔図書〕の②『伏見院』で概略をまとめた。詳細は、今後論考として発表する予定である。

ところで、上記(3)とも関わるが、京極派和歌の隠遁志向を考える上で、重要なことに同派の歌材の特異性がある。本研究以前の研究では、和歌に通常詠まれないこうした特異な歌材が隠遁志向と関わることを指摘した。しかしながら、京極派内部では特異な歌材といっても、特定のものに限定されている。なぜそのようになったかについては、あまりに生活に関わるものに取材すれば、和歌の雅性を損なってしまうことが考えられる。題材から生々しさを排除して歌材に生まれ変わらせる必要があった。5〔図書〕①では、「蚊遣火」という歌材を取り上げ、和歌全般における、そうした特異な歌材の持つ問題について考察した。京極派和歌の特徴として特異な歌材を採りあげても詠まれ方が似通ってしまうことが指摘されており、従来はマンネリズムとして片づけられてきたが、こうした特異歌材の内包する性質、問題を考慮すれば別の見方ができるのではないか。本研究と併せて今後考えていく。

先にも触れたように、5〔図書〕②『伏見院』をまとめる中で、伏見院の和歌が花園・光厳院の宮廷において強い影響を与えていること、両院の禅文化摂取には、伏見院の『白氏文集』をはじめとする漢詩文愛好と隠遁志向からの影響の大きいことが明らかとなった。「風雅和歌集」(『中世文学研究事典』三弥井書店、刊行未定)では、このことを踏まえ、伏見院から花園・光厳院へという持明院統派宮廷内での文化継承を指摘し、『風雅和歌集』の性格について解説した。これは(2)の問題と関わる。

(1)、(2)では、花園院を中心とした問題設定であるが、現在、日本史研究者とともに、花園院の宮廷文化の様相や院の思想が記された『花園院宸記』の詳細な解説を行い、持明院統派宮廷における、禅文化を中心とした

宋代文化の流入状況、花園院の儒教思想を明らかにする作業を進めている。その成果の一部は、5〔雑誌論文〕①、②に記したとおりである。

また、従来より指摘されていることではあるが、花園院の思想には宗教的要素が強い。岩佐美代子氏によって天台宗、禪宗と院の和歌思想との関係を論じた論考があるが、①、②でみるに、密教僧から教えを受け、密教の奥義も極めている。花園院の宗教の方向性を確認するために、密教との関わりについても考察することとした。そもそも、京極派和歌成立に密教が関わる可能性については、井口牧二氏の指摘があった。だが、その詳細については検討されていない。「歌の家の継承と実践—京極為兼・二条為世を中心に—」（『中世文学と隣接諸学6 中世詩歌の本質と連関』竹林舎、2012年）では、京極派和歌の提唱者、京極為兼にまで問題を一旦遡り、京極派和歌の歌論と密教の関係について確認作業を行った。『為兼卿和歌抄』に記された歌論は、密教の用語を用い、密教思想に則った為頭流の古今伝授書とも共通する主張が多い。為頭流の二条為頭の子は、為兼の猶子であった時期があり、関わりが深い。おそらくは為頭流の古今伝授の影響を受けて『為兼卿和歌抄』は成ったと思われる。また、京極派の叙景歌における精緻克明な自然描写は、すべての現象事実を大日如来の本質と捉え、行者が心内で描く本尊の姿を精確克明に描き出すことに執心する密教の思想を当てはめればうまく説明できる。今後は、密教と京極派和歌との密接な関係も視野に入れて、花園院の思想を探る予定である。

研究者は2010年10月に出産育児のため、研究を一時中断し、本年度11月より再開したが、現在も育児に要する時間が多いため、研究の速度を落とさざるをえない状況にあ

る。また、明らかにしようとする問題が多岐にわたることもあり、本研究課題への取り組みは当初の計画よりも大幅に遅れている。当然、今後も研究を進めていくが、(1)、(2)についても2012年夏季頃までには一度、現時点での研究によって明らかになった見解を論考にまとめる予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

①花園天皇日記研究会（阿尾あすか、坂口太郎、芳澤元、他）、『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年三月記—訓読と注釈—、花園大学国際禅学研究所論叢、査読無、第七号、2012、pp287—289

②花園天皇日記研究会（阿尾あすか、坂口太郎、芳澤元、他）、『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年二月記（二）—訓読と注釈—、花園大学国際禅学研究所論叢、査読無、第六号、2011、pp199—202

③阿尾あすか、源氏物語歌寄せ、平成二十一年度研究成果報告書 物語の生成と受容、査読無、【5】、2010、pp190—193

④阿尾あすか、詠源氏物語和歌、平成二十一年度研究成果報告書 物語の生成と受容、査読無、【5】、2010、pp186—189

⑤阿尾あすか、源氏物語わかくさ、平成二十一年度研究成果報告書 物語の生成と受容、査読無、【5】、2010、pp184—185

⑥阿尾あすか、一滴集、平成二十一年度研究成果報告書 物語の生成と受容、査読無、【5】、2010、pp181—183

〔図書〕（計２件）

①阿尾あすか、他、三弥井書店、鳥獣虫魚の
文学史 日本古典の自然観 3 虫の巻、2012、
pp213-229

②阿尾あすか、笠間書院、コレクション日本
歌人選 1 2 伏見院、2011、113

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阿尾 あすか (AO ASUKA)

研究者番号：30523360

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし